春秋摘花

五篇

へ 13
3229
4

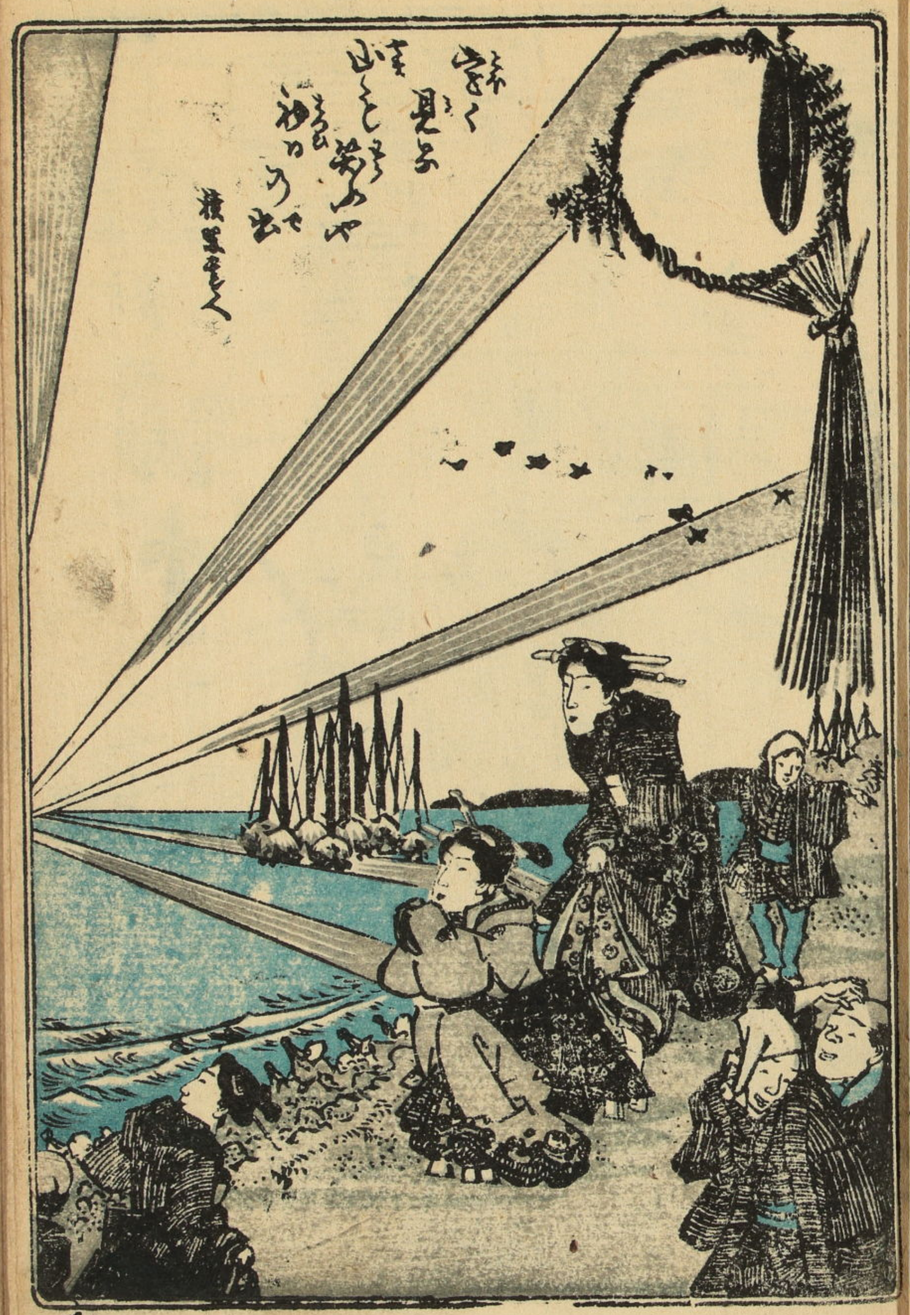
へ13
3229
4

古今和歌集五編の序

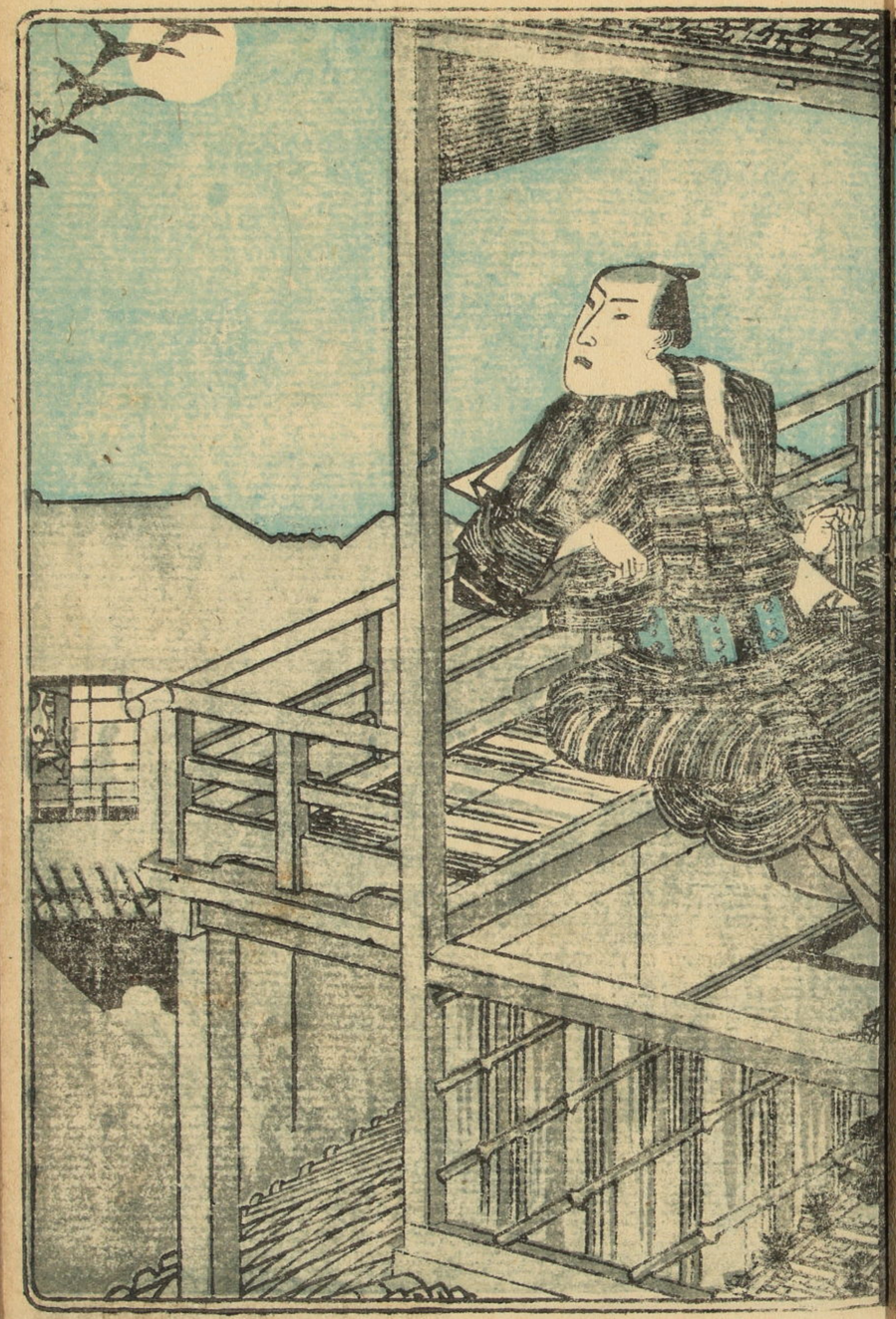
昭和十年
七月四日
購求

帝國圖書館
テカ
十八
昭和廿三年

の
執(とり)つ源氏物語(げんじものがたり)をも見(み)んやうに。書(かき)なせるを。
見(み)つゝまどろまれ。
ぬる夜(よ)まゝ夢(ゆめ)のさらつゝ
と息(いき)をまくらべて。白妙(しろたへ)の
袖(そで)もかわくまもなく。物(もの)思(おも)ふ
なみだの。ふせ
なきまでの風情(ふぜい)あり。元(もと)小法師(こぼうし)更(さら)の類(たぐひ)。
なりけん人(ひと)を懐(なつ)けて。隔(へだて)を断(たち)の儀(ぎ)下
もあまねば。武(たけ)き悦(よろこび)をあらはし。願(ねがひ)を解(とく)の
あるは。これ芝切(しばきり)よく。承合(うけあひ)すまして上(うへ)を偽(いつわ)
帰(かへ)るの伽(とぎ)をなすまでの
事(こと)まで。思(おも)い用(もち)ゐ。給(たま)ふ世風(せふう)を。
書(かき)のこせる。新(あらた)の
その頁(ページ)を。枝(えだ)折(おり)の
糟(かす)を。拾(ひろ)ひ集(あつめ)たる。文漢混(ぶんかんこん)然(ぜん)。



さくらばな　せんそう　みやこ
さくらばなの千人淺草の宮こ
ねんき　それ
年季ようにそこまでと芸なら
さと　ふね　と　ふね
砂や材の木場茶よもと舟
ある　うら
井いもまだ三年ここもありよう
と　ふね　ふね　ふね
着くや舟唄舟唄
ふね　ふね
舟のまにまに
ふね　ふね
舟唄のこの隠れ家を探
ふね
着
金木欽白



貞操美談

松の花

全本十五巻

松亭金水作
歌川國直画

文溪堂蔵版

閨情未摘花事 編巻之上

東都 松亭金水編次

第廿五回

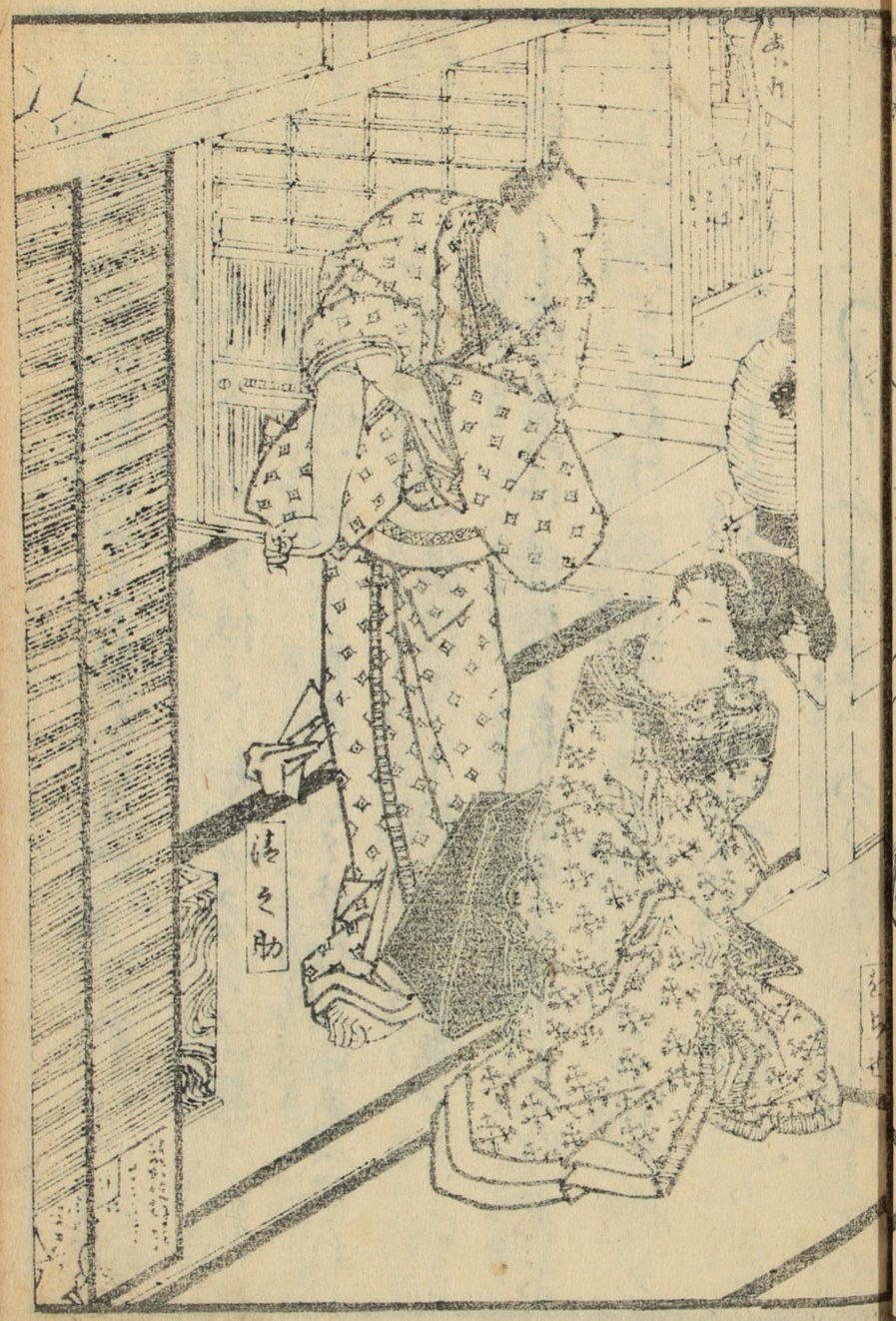
おーぬい　清「ヱアもうそれでお暇をさせねっ。さようなら私は
押抜け妻女が袖をひいとうて
まあそんなら。是ッ限りそれでよろしいのう。そこを忍ぶのなんのと云う訳は
のうまあさんの。お蔭で人並ゆーて居さるは
誰方ぞうそこまでのう。たとえ他ようが晩をおとりごうて何しふ
私慮と仕ますればのうる。ちょし
来てこそこそでごろうが。その訳は判ざりトおりんばも
万をつかう男受されてもの人形
とと結んで万をつかう。米沢弁が叔ふーて。あの男と茶沢弁が
海の中へうねて受おりびるまうと人ぶ。娼妓ぶ仏のうあ係まうの。
たとえ半八時でとも。おがあるうびう男受して。茶沢弁と祝せんと。
思ひ居さるぶ男気の。智りまうと云うごう。今回あの叔を
時のとーて。親兵一同不通知な。女を脱ふまるのう。何ぞ幸
しそこの縁談で。止させやうと思人ども。固来。当人同志の
出来ぬ中で。延引するも訳まれば。強て止めもさせられまいと
さまざまとそその女の。親とその奴が名うその悪党な兄を脱
ふ越しそ壺で。金蔓ぶ出る様り。左伝の女を捕ーてハ。

ゆくゆくは
他人家のようもうるべきものぞ
柏枝ふさせまじ
で種々工夫してそれこのまじ
お後のうんのまぐふ
もせじ。他人同様ゆえ
いよく遅くるようで。今朝
て参るとそれと故障ふまず今夜
海で柏後のり合
仮細ようのもうー
居ゆやう
たと親中
まで。ろうを私がちやく
とのひ
その中ふ。サア遅くる
私も実に頼まてく

蜂「くもがおりますの流石
おもひ遠そで住と白羽根町まてそちら往の人形のと万
ちやうさんの教もものとでがまさう心ふうのことを手招
も世ぢ元気さんが住してあのそ私へ参て居ますことが
儘で思ふやうでへ。驚れ雀綿のきらびやう。ありひも
よふ私落ぢ出てさぞ来さんがと思つてう。程屋ものと
時が法螺やうで面ふこと。浅海しても浅と死。濱うと接
拶仕やうとの。方ちやうさんが口捻をヤレ嫌しやと思
早く御取りますと親子御ふたり様
ぢる更へ御ぢ出でを今の駕の
の駕ふたで遠ひ二年計
勘當さきとのこそぢ。モシ五一て来さんの。名が過ものの
ふう私ぢ自教しと同参でアの花しと空らうと。云
も絶ぢ来伏て。参もをしますね悪しこの涙と降志
ぐる心のまゝとめふうとそ。ぢも弊悪清語ぐ売れしる
儀のを画引よそ出ぢ利刀を。呼ぶ小椅て吐へ実ふと

まるで見るよりも。妻世ハ職てそのまゝ柳へ
行灯をつるのご工ト留るとゝ見るより清
七。ハてもまご〳〵ハ居て「ヲヤ〳〵お政
仰をするのごナトのそゝそゝ清
綾りごまを。私少〳〵小茶さんゞ万一死んごも
まゐて来気で居ようやうゝ。銀ようゝ見てこゝ
ゝも思ひなませうゞ。各〳〵の
して死るびゝ居ようませう。

しよう思い違て仕ようゝ銀気味と結句
らうのゞ。今りよ通り左様さんすまごハ
居ごう女の縁を断て。私を死
まごゝと思ひ。死てそゝと同
婚いやうで。ゝ。まゝ気のこと。
の伝切を。書ゝ悪へ来て生世の
野ゆも老ゝ名白羽根町へ。仕
ゝまゝト来き候話のまゝ申



して悔歎く。書下表をぐるぐるまきにして
分解さ。日来うんうんして実候と
まで思ってどうも表個を惜んで死ぬ
のと。他の曲尺コサ清話をして
け合ごとまでつけ清話く。哀の中小昧さの実ホ
まこひて頼をかんあげ。油断をかつこと吻く清一まやまや悩ら
しまく。私さもアまことに書こと思って。何程ホ哀しうざる
もこさう。実ホ好しして居る宅へあうまんどん。そこでや
動かされてとのホのも。不残呼ばれまそくト駄うで御仮伝(表)
まで動書へ宅へサ。書うし今の説できけバ行もかもをろう
分解さ。何でも書ざうのざうと。推量うして居さうで
ち助かも知ホ引きて。叔母と一味合体う。ホーー山路表
どうでもうう。先さー書つて見候を出さばホ。有うけの
出来ぐく大書りぐ。そこ処で清話まぐお祐の胆をつぶそこ
とがめる。そ処置れをあやうくの人をへ。お祐ぐ妹のお里サ
ト夫より細りホ一什のことを倶話バ清話怕ーして久く

後く侍令ふ女ご三人が男の雛形のそまに雑談
をぴごろ〳〵思てそも。のるふ甲斐ごのさ公男のそうのさ。
わく〳〵もが前書伝ゆも。そそてあ
貢ても。女世帯のやるせうさ。説話きく〳〵さ人棲のく私。
そやく男住ふうつこうう。女ご三人住くふ毛金そそも
侍ふ居て蕾。うそうぶ雌〳〵うと。平生ふ思ひの絶ゆまえ。
添て苦界のうさ勧め。人〳〵久よりも早〳〵この人まを先住
ぎふ稽幸く。年の明のと笑〳〵てる。皆いうちこそ明らめ

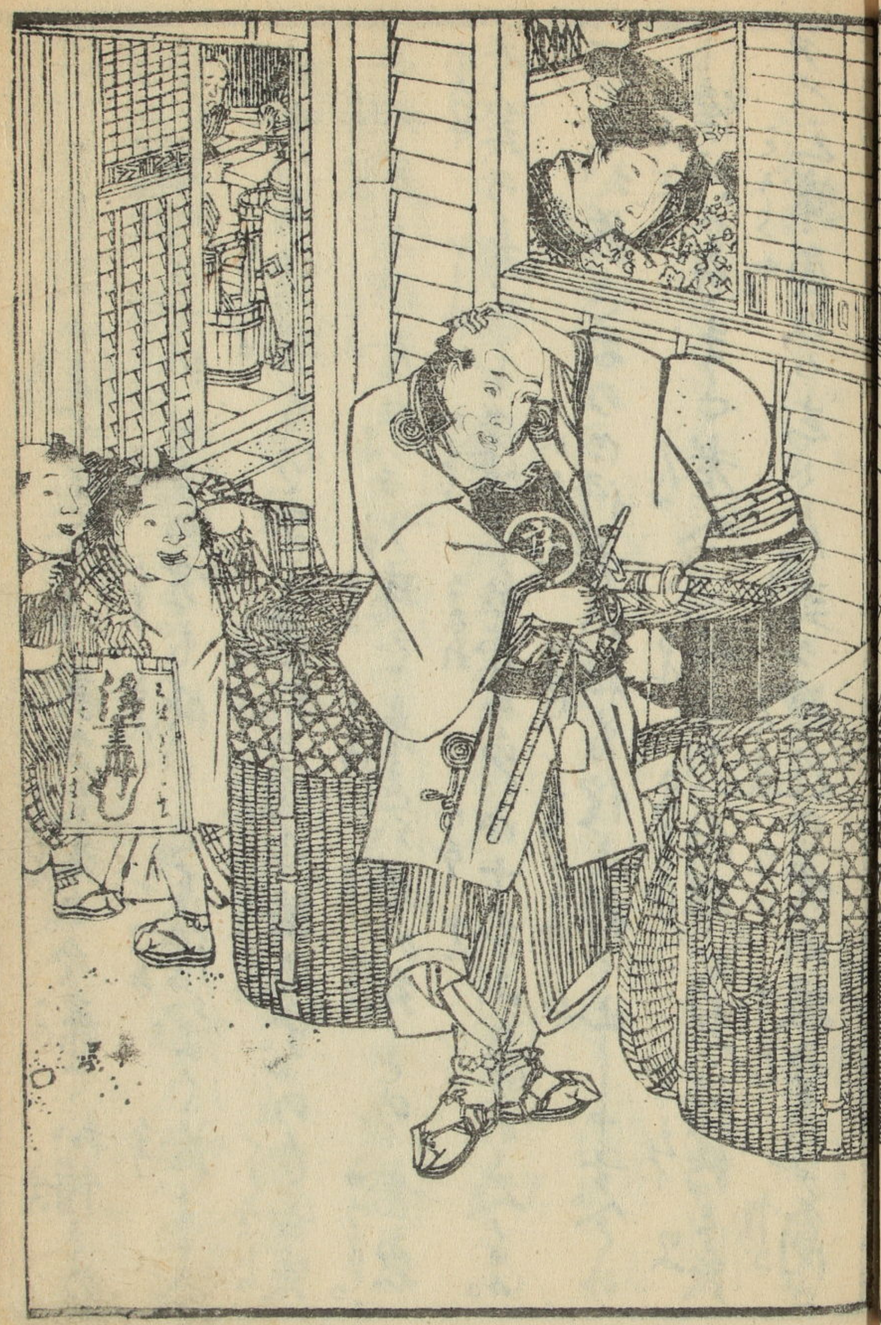
よもご今年年の一年ふ。うそいよ〳〵のどう〳〵きふ月日の
うちふ男交され歌ぶ風も初のその。化の汁板のお光ふ
されて。思ふ玉方へ夫以ふ。勧書の男と寄く時へぞ綴〳〵
きふ百倍の明をいくて愛住以ふ死すよとまでも思ひ〳〵
を。まこ門久て妹の。世ふ来生る毛お説。女さ住ふ楽男
とう〳〵〳〵千夜万夜の金を住男ふ書ひ〳〵よう。うまて〳〵さ
落るとへのよの。姉が思へねそうら。手紙を所げて。苦
労さまるへ什麼伝の因果ふ指ぞとまと繰くま。綱の

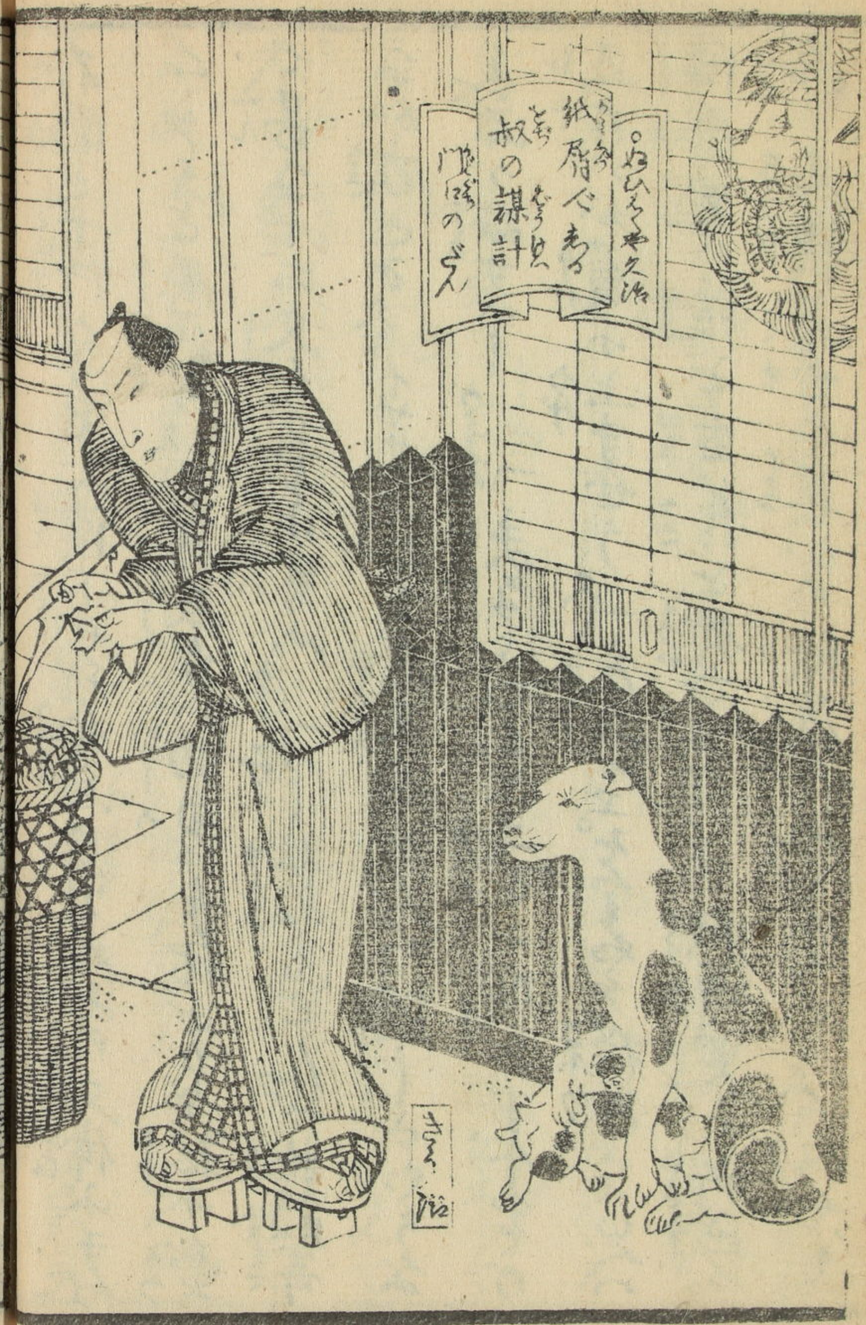
たらぎ百羽程に成ても捨置りうるき。まだ幸ハ熟そて来イヤ仁もかも不残時名サ。色孫をのべ腰りもないる。彩
明く地ホ志まそそまべ。ぜ二方ふあ
人の事こそへ。誰もまられんうと拵内こで。サア白羽根町へ
出そくまろと。胡ホ吸ホ万をふ。さんとも助をおのの三妻
つけうの本人その内ゆアサ二方で。手筈をもるのがめる者ふ
の本ハ善女ともよくお使してそ
までアリ世との目。大きホ

善世も筆でも亜さあ。久しぶりで一杯とのひ致所ぶ。
左様して呑ようち仕そ御ゆアサ筆
くまく様やせうト急ぎまそ大きふまるサア清さん助。幸世も仕ホ之
上まべ。今さら名残惜まれて。ゆくともうき風情ハめ
まとめして。説をるうちゆも。万堂うち助が素く世ふと
大ぶ隆そんきうくも。ちと脊伸ホ入口之又くる鳥
切うそまべ。留ちんよしもゆくべしそ。まそうう元人さん松葉
元よう。佐ふ善女で。と喉乞。まそまこ堅田小群呑る。ア

一建ぞうとさち。添めら侍の座敷へとまるふけ
見よう。茶代弁へ。の悪ふ長のお里が家ふ。老世ら。諸
とも。ふ社お里へその夜より。白羽根町の鍛見屋ふ
止宿で。夢ぐ〳〵と書をとおるべ
第九六回
私を話のそ。傳ふるべ。神田おが町へこの佛ト。意の宿ふ
聞ひ〳〵ぐうと今より昔のそ。物の加減う私うちばう
し。腰ふ一ツの鈴を提で。チャラ〳〵。低骨栗。恋と
よく〳〵泥とる夢とふりこむ。小姓市中よびあつ。就よ
世の間を茶ゆ〳〵とふ。お楽さんともふるべ。あく業ど
唐のまん中。梅。酒ふ。わらも中通り。表ハ格子の二間は
種物所とお札をそ。二階ハ久治が計線場ゆ。雛へ
隣の無楼花四時の英花鳥の彩色。て
ふ。乱根を箸〳〵後の方。除くとお流ハ茶碗と土瓶を持
をくて二階をあげ。お客ハまアよく根が参ませんよ。
も相生の徹えまんぞで。楼くる神祇と徹ますのとそて

紙屑買声をよく〳〵買と悟で参る
うち
婆やせうト云うち下〳〵ありて。押入より呉服紙を取出し種〳〵
の反古を把出〳〵そ久「サアこまでござりまする
ちやう婆ぬせ「ハイ〳〵ト申ス在中ハ頂きますんレト稼を出して
久ゐる「おうゝ。尊と眼ゆ〳〵覚のまゝ御。縁の中ゆめうそんて。
久治ハ喜〳〵反出そ。筆より早く引出せハ。ひろげそんきうふまわ
りゆ。悪ろう〳〵多簡の反古。究名ハ相生万ちやう板下ハ式
きゝも古風とあるゆ。叔の名義で。ま御さく紛ひきやすべハテ
不測と。十行だるまを読下せバ。合点のゆり反その文体ふまぎ
ゐる〳〵と巻納め久「この反古ハ面白ゐまを頂ごうぶ。私ハ喜
て呉る。十六文だるまふ買ゆ「ハゝ〳〵呉ねもごんざ物数寄
なお方ざよ久「イヤサ十ヒ拾ゐ廉屋並をぶつ潰しさやうな
事ハ好サハゝ「夫るうちまハ二百ゆ頂きますそのの
反古ハお買ゆ上ませう久「左拾ゐ工。そるまやア粧妙ざトいくべ
紙屑買ハ続を壺。箒を揮でチャンく紙屑買と行る。
御ゆ久治ハ兄世の最。かの紙屑の躰をのぞき久「何でも




紙屑と
叔父の謀計

叔母のお源さん遠く於久さんがハテ異な文言ぢゃ。マア兎てもお情こ
白羽根町の一件お里の方も随分とよく〳〵ぢゃ。
まだ不つき清猫もいよ〳〵賢礼の咬ふ振迄ぞうのまだ吾実
ホ妙斗みのさんハテナ。再く兼次郎さんに来ゆゑ四十分ホまのびく。
何まだお源さんのも行方ハ私も従く探し出すべくト儀ぢそまと考へ久〳〵何ざう一向解せぬ。清話とハ
アノ二浦屋のお志ゑんまだ夫が賢礼の咬ふ振迄とハ、デモ聞ざ

まだお源さんの行方とのも異つまざうへト義八夫うと
心のうち。儀ふる清へ密とまて。御ふり咬屋るお源も明り
ハテまアこまでハ分聞るお源へ何迄も隠ーませう桐生の万
吾倘ぐ親の名。そこぐ何ーてお於振の叔さん
とまの於久さんお前へ夫ゆゑ兼次郎さんの親まアノ
幸せさんぐ姫ふ性様りの孝ハテ何ーて夫をお於振ぐ
久ハテ和ゑ乍で何の名するりのト夫より福屋へ出入
のこまでこまで幸せう始末の祖。活潑べとまふ下剛の男。

今回又の万吉と。奉て時より
久治八。呼て勧るお治ぶ素生さそく左様うと答ると
ぞありうまて迚で居そうーぶ思ひ参ると
うぐく鳥そのおうう。坊う久奉る母の沖津。門口あけて迚入る
顔でるよう久治八今ちくゆ。ちて。かの
女おも儘できうせ。修ふ行ぶる事く喘息奉る。
別人するね叔の左助。居ると迚ーと母親の。沖津かち助ぶ抱く
もうて。物いそんとする景勢ふ。久治八まぎと押潰そ久へ

叔さん何ごそ。大変そので出生ぬまち一世乳の様る程ぶ
めうそョ久へそそそア何ごうそ乳きふ
みそそ面をふ。小額の汗を袴うら事越で走ぐく林
を一師さんも久治の母を久治ふ久治もまア
こを特まれてらんとそそぐ着の茶青。今更後悔の一切サト
りふ久治もの母も。実とふ大ぐく奉ーうぐらふ走新く
して理をきけば左助八のよく多面ふ出て。彼万右うす情
まそ。笠根この股汁をそ夜より。

米八事ハ勤番なりけ。お里ハ白羽根町に睦ましく。いたすまで
委しく語りて　き「実に梅香を似て困りきる勿体菜
さんを困らして、終を医者としたのハ万吉さんの胶汁で。
清節がまうら。何うかに危て一本ますや。そちらの分残を
ゆまその所為といふのは米さんが勤当きましてハ
思つてゐるのが、不仏に歩てゐるしや、ア不残狂言でもござんすが
心で後悔をするだろう。アノ久治といふ人何程まうら。夜らう。
こちら方もお世話にかかる旦那の身。実ハ依様もアド

やうくつけまど。イヤハヤとんだ始末になつたのサト一件の
動しくに懐より。久治ハかの文古を見出して　久「太やアら
手簡に違へがあるまきすらなト友助が徒の清へおけバ。友助
ハ一眼着て不精貞　友「ヤどうして是がト驚くを母の沖
津も縁すすまきせ「嘆さまへどく不しけなし。誠に呆れ
けてあさ初ねた訴の理でアレまぐ。万吉さんとも
の段落へ、すんざら全理でもあひけまど。菓て久治がおせ
話になる旦那とのつも知りませう。何もお家が一味して

ざんな具合に苦労をするのでも。至さうに
貰てでも。弟一ダのまでも左様にさせるの
家出をしさうに起つくるの。サアそのお酒が
でもくふ居るヨト酒を指さし「コレお爺ゞ居
うの斗りで。まだどの程ぎふうの
お母さまへ早くふ。白羽根町へもまうをつみて。
ゆくさせるものゝそこまでおいとおつぐ
き羽さんくへ頼を使て居る。お勘ちよくへ作天へそ。

ナニこの嬶がお酒さんとゝイヤどうも呼らへ。何程もこゝふ
居るまけがきまつて「多さうな而ふ居るうらゝ石潤さ。そ程の美形
ゝゝ久治う清ひ事りへ「ゆを性せべいよくへ頼くゝ勘ち「
彩のよふと彩つてくるう。乳を揉ゆへ及ばぬ。そまゝ杉へ来
さんをゝその侭ふーちやア参まこれへ「そ程で来さんの居れを。
叔さんへ彩つてお在ろ「サアまだ「彩まうやア仔細へ私へ大
うこゝ忍が居のお里が方と。推量へして居ても自己へどうも
性様へまだふよつて手方ふ情へ。来さんの森家をきて

閑情末摘花第五編巻之上了

閑情末摘花第五編巻之中

東都　松亭金水編次

第七回

宮城野の本めらの小萩多くかもこ風を待也君をまそまてべ
えんろ
其秀の雁の日和のごけき小春月今日八十まり七日ゆ犬意
大悲の衆婦へ歩こをとぶ学験の祥集同川菜飯も田楽
も。衰きまこの樹れハ例もうそ繁花の土地名さへ浮
の度小希も。完遂様き往来のゆぎまひ一料理屋の奥二階

米「そうもやア善悪のいふまでもサ。まア彼お滝とのよふな少女もゐるんぢや
ず今在の半畳ごとでも。餘まり能智よやア私へう。落をめく
して他を騒がせるめやアめそうれへ里「ナヤ大そう悪くのそなの
さるゐ。男実利よつきますせ米「何般く里「うぢとそでよく
考へてお覚なよう。お福お配偶くくと言てだろうと楽ふこ
ゐーて三十里とやらのふまい所うう。お主のこ。ゐざの何のと
おそもさるうう。そうまやア私を他ゆーても何福うもる気ふ
るりまさアる米「大違くく。固来自己ふ恥て私ごと

うみうう世こアふ不便ゐ而もあるけどご傘く左福どやア更ゐ方
の私推ゐやア。定ゐのひ令ーそ推を陥ー。自己ふ難気を吸ゐ
けこ而がふれ而も何福やう。遠福やう。向ふのふ事りふ仕よそう。
まこ悪巧ゐーて頼く自己を通ふ方ゐこそ而ゐーて。頼く自己を通ふ方ゐ
と。実ふ悪さもくやそー。ふ頼が悩くーて嫌くうこれへ里「
そうやア私さんへ何福どう考ーふ。女こいの考へ一面彩と
ありつこ人ふ推うまつやア。私ふ気ゆも世を捨る気ゆもる
るのふ。善悪でできるますうう。まご私へうこそもるのお滝

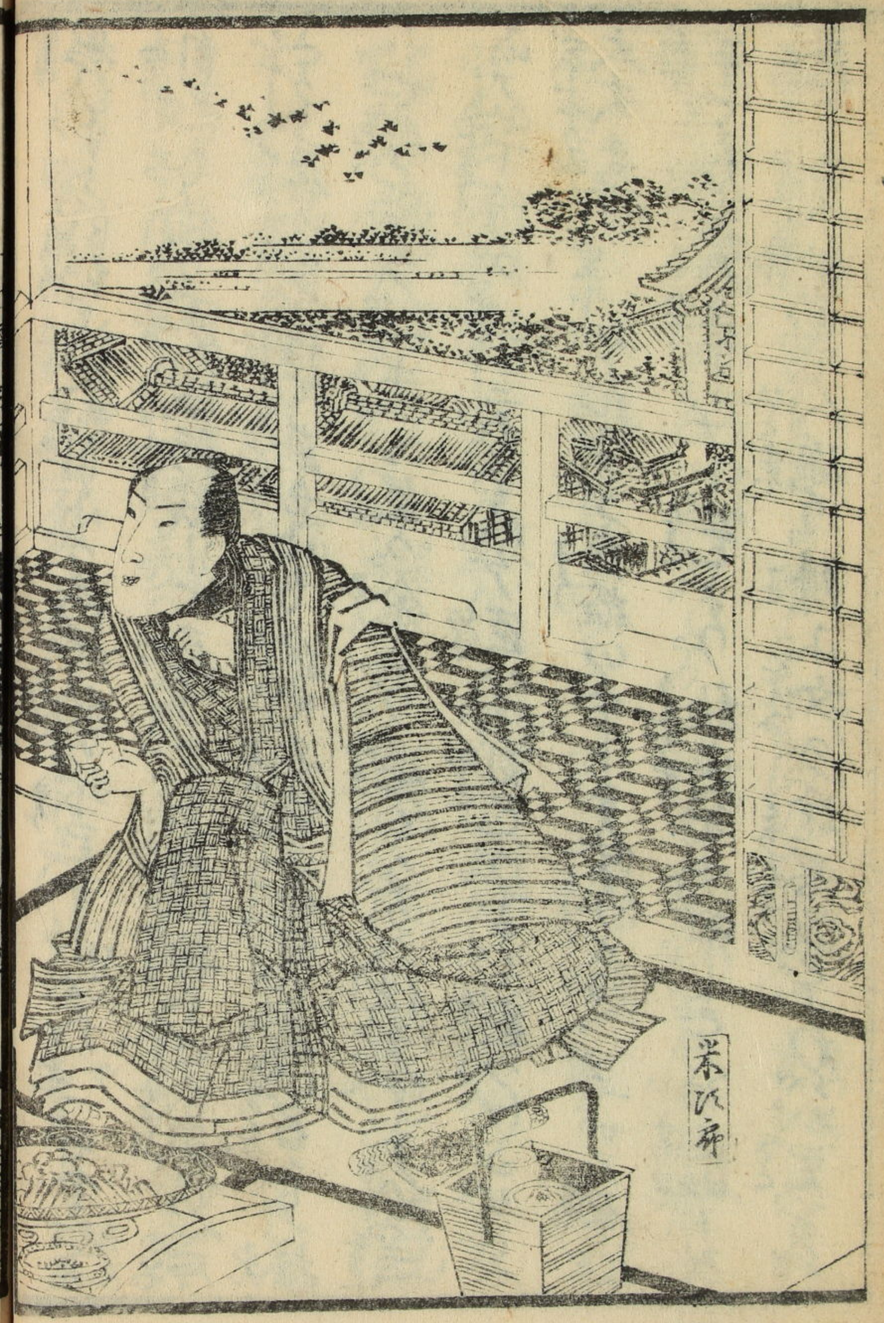
さんのやうだけど不思議なこと
つまる関係が初めのス里ヂヤ
るのものが五十も仕ますまい
越里「十二迷惑なことのまますもの
をお断ごうと。若うなことが出来ますへまコサ左様思ひもや
実起流ご。治面お前は無まて一年籠り。情を立通しことと
のふ自こさうのチ里「夫八体小姓しうござりますが。まこお
前様仕ふ在もまくって何故アノ婦女が振込で来るやうな

ことを仕てお呉ごうこと。夫ぐのまでござ分ませんョ。何でも鎌倉
も堅い約束をして。お垂るすっこらうと思ひまし八米「イヤ
その婦女ふ弁て不測な関係だらーがあるが。ヲヤくそ
うやア姉で覚こと駒さうョチヤ婦ぐごいるー冷こと言を
チョくこと宿せバ下より下女来る米「ちよこまの婦を
温めて呉る。そして下ふ居る丁稚よ服でも含し。旨ま
下よ「ハイくト下まて往。やがて婦を垂して持て来る「サア
お室一ツ飲ま里「私八像よ弱て。顔ぐ火火とします

来〳〵ヤ丁度ノ加減ど。先刻来
来ル時ハ余ざ苦労をシた事ど
らうと。実ニ可愛そうざと里ニ十ニヲ私ハ何ざそう
ホ居その苦労ざらう。宅ガお祖母
さざ宅めて悪ら長の宅へお出るすろそ。清さんや嘉ニも
年てお在ざらうよ。思ひますけまど。仮をまる
さすけ
右助さんもモ居一向来ろらう。今日ハ
ろく
静くのので。記憶さ名人来つて来よいとて生まし〳〵ご和

思ひよらびろしてお関ふうろそ。狗ガ下つまし〳〵来〳〵そまやア
自己も狗ガすつこ何狂して居
ざろう悪ガ多人住で。為ゆも通て女姫さまるが並ぶるろう接
にて居ろアる里〳〵まも並う。金ろの
ホアノ丁雅ガ来〳〵十二ありまやア並ハナ。自己ガよく毛つけるろう
大丈夫まど里〳〵そんろら左右のこ〳〵ま世ろうよく来〳〵サア早く
弟でも高め幸〳〵ナト色より動室をすま〳〵こを並中〳〵ガ。
先ろくホ勢き人通う。残ホ女の途景敵どわバ。お星まバ

ロマ字うりや
互のこゝろ底
語る橋
我一カんのぞん
おさと


栄次郎

どの家も寂せて。恐ろしい男人と為ぎゆく。あゝ私を世と清く助ハ。其時ぢ一人の女性のみ。その間もものぐで杖程と。時この一人の男の泣雑ふ。まことも苦労の夢の思ひ。男二階ふ射望て。突ゝとたゝひその男ハわるい。門にのけて男の声「ハイちとお情こゝ申ますト叫ぶて二階を清く助下つて来ます。年齢。二十五六の動くね男「何の方ぢうお歩きさのまーと男「アノ此方へお里さんのお宅ですぢうお。何ぞ此用ぢう私ハ作業て仕さいまートぢて男ハ家の格子。おゝく。とて声ぢうら男「モシ此方ま来さんとのよお方ぢ。お在へうまさのまゝ居ませんうまト問まて何と言ふべき。泣ぢ一ふ素時さー清く助ぢ。怨地ふ思様ーて清「左松サ。手紙ぢ方へおます。ませんみ。そまへ此方ぢやアどぎるますゝ男「ハテ何でもそのお里さんとのふお方の宅ふ。お在きろやうふ叫ますーとぢト松彼方此方を見廻して。帳もつくと思ふ。妻世ふ

よく 上り足頓さー出て来ア 清さんア人が 種
二階の 入でョ。兄さんなんぞの 様び
稲荷の 出入でョ。私の宅へ
式違ッ。 清「今ウ来ーやアお里さんの 叔分
ゆゑでも 来てのーやアねえう 清「十二左様でもありますョ。兄さん
ゆやア 稼く 世帯ゆも 持て居る人ざらッポレ 先頃、泥町の 宅や
の二階ふ 居と時。私と 呼て 来と人サ 清「今左様く

まだやアお 帰らぬで。一昨ン二日来とるがめるぞうまでうとまう
ち人ごと思うこッけ 「ナヤまこ 徳ろ 清「十二 差ぬざらうト
りう 来ても門口を。ろうこう 呼て 来ぬ年。這入る 姉ろ お里へ
菊永 里「清さんは 貴ぬ 清「ナヤお里さんぞうして 来さんと一
伴ふ 「ナヤ 姉さんうエ。まアお 招ぬ ぞ。徳ふ 毎月く 雪
ざのりーて居ます ス里「私も 稽く 来て居るけで 向
ふ来るのハうまずぞ。ろうぞう 様で居ます 差ぬハ 来るうへ
「ア、先刻 名の 渡仕て 来る くと

おまでゝみ何処ぞおまぢかまぢかへんなさう見のへ里「左右へのけ
見のふへ「滅多へ「ゆるまいう「清「ナニ手招ふ幸吉どやアめる
まい「ゆうて何うも幸ふゆるのうも里「アて手招ふそおとこちやア
居うまいへ「何故ふ今夜ふお泊まで泊つて四境大石前尾ぶふ「清
おく「泊つて四境大石前尾ぶふ「清「宿さうなのんぢやの「遠も「素
とまけうまふ肝もの且那がけん方どうふのもの
ゆくく「来「コウ幸吉今夜丁雅の徳松ぶ。お里の伯をゝて来
とうふ。今夜ふ待ゝて置とぶぜうも源吉ふ「徳松う困るふ彼奴来

ゆくく「方へ「清「ヂヤ気附ふ「徳松う困るふ彼奴来
お私合ふへ「長吉きつふ「来ふ「ゆまで様うふへ「ふアふ
うまて住吉ぶ宅へ「泊つて長吉ふ「
吾倘ぶよくひつけやアふ「宜「そりやアふ
ぶをのけて一室とうとお「徳「チヤお娘さんふお隣の若旦那ふ
「徳松ぶ「泊りくく「徳松う方へ「送入まふ「徳「ハイト陸
「徳松ぶ泊りくく「ゆうこ。宅どやふ
徳「まくふお五月さうう。赤頭ふ左松生作まぶ笠ぶのまゝ
おふくう「参あさんうお茶椀のことを時くふ生作やアお湯ふさい

ちゝ泊やう　里「まゝやアまあさんがまこの苦労おさきのます
末「とゝさまがゝ惟一晩のる母さん
が住てゐのるも知ず里「左松の不理ゑう笠けど
うア今夜お泊りっちへ兄さん
さんの口説で。今貝宅へ寿て
もて差てもゞやアうのうま「ナンく
徒ち旨己よまうして垂れ
久う。帰への縁も有る内へ
だううまして
ぶうそ。清が沢山のうう。酔ち
里「ヲヤ清さん味方えうし
お家でうの。私が何時も泊
うそだうおこもご寿ぐる
里「アレまあさんお爺へまぜ
薄よもうく呼て。この通りまる
んの婦さんへ。不ゐへお飯の
だううまして
ぶうそ。清が沢山のうう。酔ち
里「ヲヤ清さん味方えうし
お家でうの。私が何時も泊
うそだうおこもご寿ぐる

何ごとのおと自己よお淑とうけくまろゆやア開ゐの森の垂元ゞ
種、むづてこのうち。是うう何でも
やう里「アレさんざことよ。お祖母こそまで宜らうゞ。何程しそて
私どもゞその仲間く這入ますものう清「もんうまう。
さんハ二番で米「何程でも飽う「ゐ。コウお里ちよいと飛揮
てもやんす何ぶう滝ーい里「今まう宜ゐ私のやうゞござ
「何の様うまゞあるものう清「二三絃を持て来ますう
里「アレお止ヨ。今ハ為ゞくと時百ゞ悉のう米「十二云

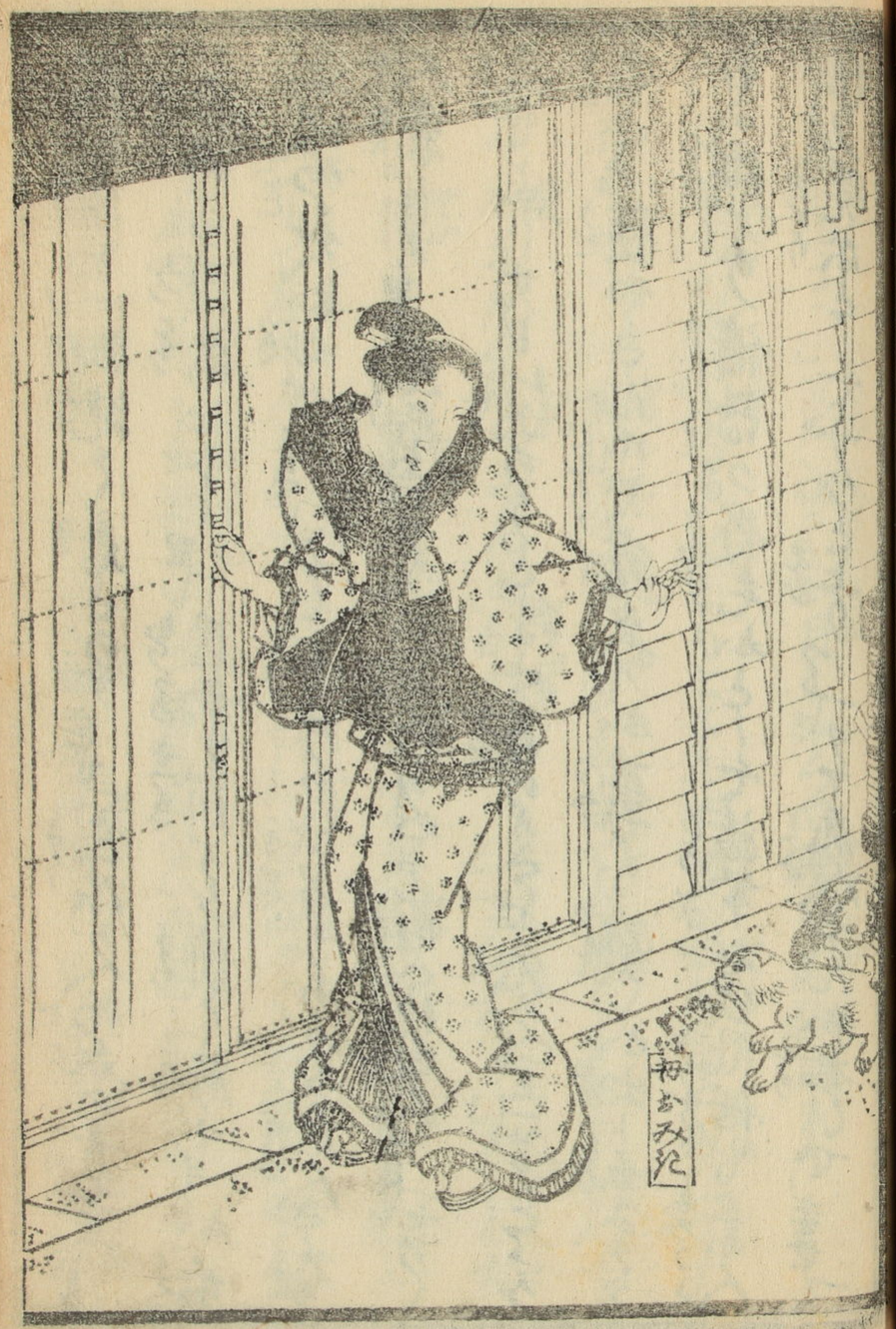
訳ハ自己がすらア。清世ちよと持て来なトのゝ米清世ハ二絃
お持参り清世「サアお里さん里「夫ゞう宜う米「宜とのゝゆサ里
「夫ゞう飛揮ハ毒々せうトト調子を合せ
ものゝ心意気をちよいと唄ひませう清世「アゝ嬉してお当ス世
「若旦させう毒々するゝ人。末ゆや彩や
ハたゝーやせね
里「ヲゝお清世さんお祖母も左程ござらう清世「大きふサ。宜清
さんゞ何程ゞ腎ふ性と。当てお前ゞ

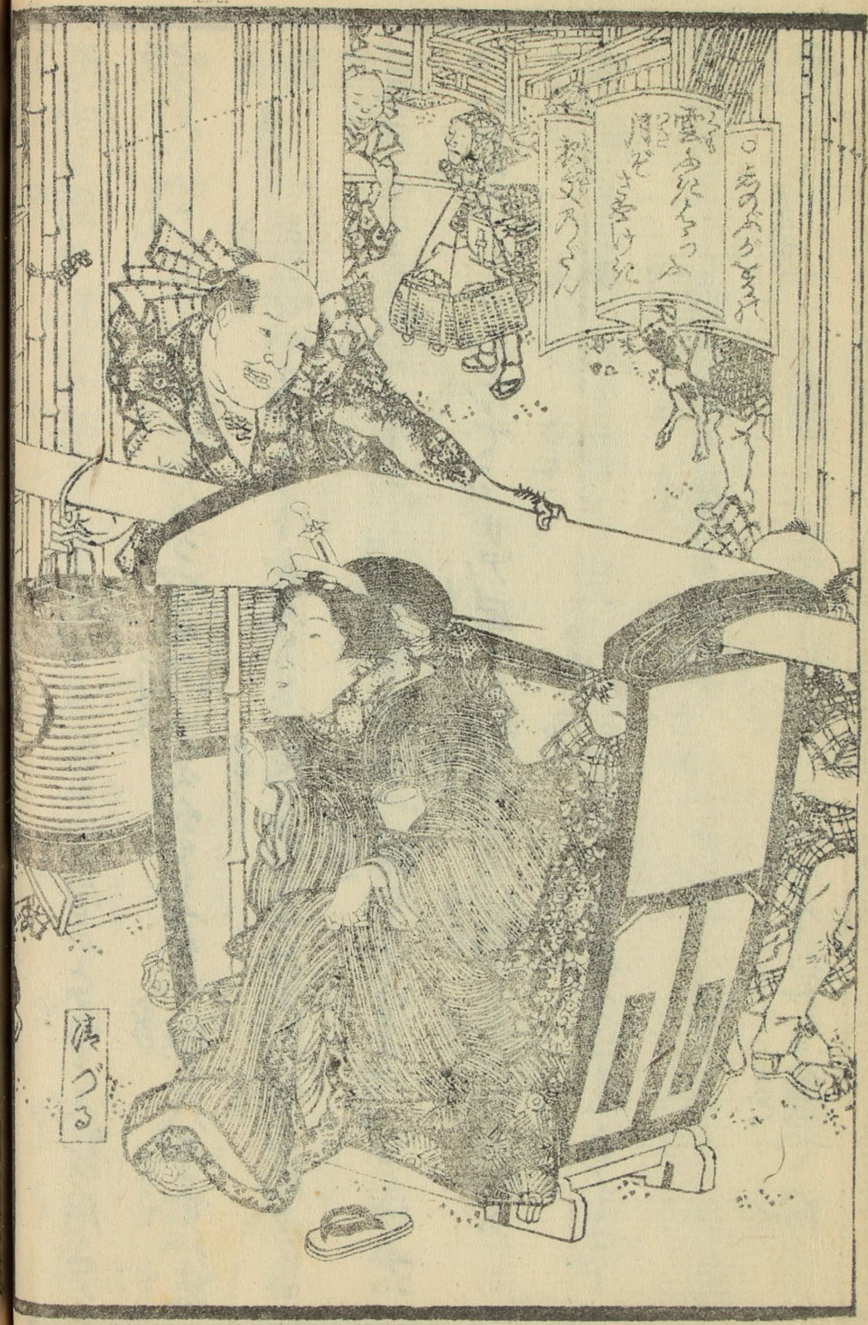
苦労して死ぬも世だ。到さん婿よ仕えん。余まり情のうのこと
どと。その時の恋ひくの仕様でめうまーさらう。まこと評でその
ん恋ぶみを出して下さいまし。自己一個死ぬうと
り覚悟ぺうまーのやうて恨こうも人ども思ひまーさん里二十三
めの時八私も若女も。ハツと思うて驚う毒人さよ。もう一足海く
く。その後。何様な強ぎが出来る私ぞうさまうの八毒世へ左
う私ーてうると。私ぞもハ花世よ。余ぴど縁でもろさう
みへ最初八若女よ私うと。再び会へお若ぶ助らうまー。後よ

命下の親とやうぞみへ清「イヤモウ
ぶ宅よ主人で居くそうる世。仕様人のぞ。おま
波素着家の縁成りぞ。「コンサくまさ私る寒ぐうを
云出ーさよ。ちうと盃でも流り世ろう毒「チヤお婿ぐの
今ー冷ますーと里「ドレあくお入れ清「トキ二杯さんお飲へ私ぐ
う平気の私ぐぞ。ぞうも私ども。今回の一件ぐうまーよ業
て。先刻と毒世も種く動して居さあぐぞ。まこと何様して
お里さんと同様よお出ぐろう。夫ともお若様モウ主人お捨り

久「左様じやァ有ますめへ 米「何様して帰る所じやァねへが。
お里さんハ浅草で有ますよ。夫から同伴に来られたけれど。私が
つて来ねへうちハ帰らねへのが。どうしても論者が知てからツイ世話
ふるへるのよ 清「ホンニ光訓さんハ知らねへ男が。お前を尋て来ましたよ。
跡で幸世に聞たら。縫箔屋の久治どのといひましたつけ。
何ぞおん當りでもありますか 米「左様さ何も心当りと
いつてハねへが。ソレ夫じやァ幸助から居所を聞て知らん 清
「夫じやァ其方どもと来て様子を聞ば宜かろ。ナ 米「十二何

様でも宜。モシ其聖中も来たら。些と此居ると来てく。何の用だか
聞て置くれト詫言する様子門口迄立たりしと聞ば幸世ハ立
出「是母おくりろト言ながら障子をあけれバ母のおみき
毛示上りて内へ這入 こまき「ヲヤどこの娘やらぞ 幸世「アけれバ
子お里さんがお出でよ。サア早くお上りナ。嫁に逢ひよしく。
光訓から荒人が挨じ云ハ こまき「大きに手間がとれましたヨト
いひながら妻の方へ顔を出し こまき「サア女中ぞやレく御苦
労く 幸世「ヲヤ後に来てお出か こまき「アイ私も後で嫁ら


和おみ


つづく

がな。お客さま一個連れて来るのサ幸世「左様ネ久仁の方さ、
「吾妻の座敷をおく里「差好。先刻ら待て居さョ。お松
まア仰山にお出でなさい「よく来てくれたネ。
大変ドヨ里「左様でらうと思つたから元人さんが
来もよ〳〵サ。ドレ上らうとまさ義のうちを見て「サアとてが
宅どヨ。後やさんも若旦。まアお茶でも飲んでお出下さるら。
よろこ酒より清話が。周旋おとつて旅行。苑おとてずつと上りつて「ヲヤ元人さんお揃ひで幸世「
よくお出でなさいました初てお目にかゝります
清「ヱ〳〵面目も。酒どや「私ども立派も居ますョ
つてらうハ〳〵〳〵「実ネア時八。居ても立ても居られませんでョ
里「ヲヤ姉さんの元人さんと初てお目にかゝります幸世
さんと清さんとお出での。ヲヽよくお出でなさいました。実よ死ぬ気よ
亜の酒うら米さんがお出で。実八ヶ月ぶりさ
嫌ーサ。ヲヽ姉と三味線とのひ。一方ならぬ心苦労をみると

もそ〳〵で表個をぐら〳〵ヨト叫ム時晩ろそ業び帯が訓練うさ
れー媚敗ゆそ。警礼の夜よ被せーへ。清話うとさそーりの
くらお里へぴよく〳〵慈縛ーて。姉と妹ぐまそ元のひ。表ぐね
エ
ゆーとへのひなぐら。化の三業をに伝とおりひ。姉へ妹ぐ才の
出世を。防げとうーを浸悔すまぶ。峰乳へ女みの情ーと。
までそくも慣るや。その夜よりーて良人へ動者。紙画
うさへ通女の。常とーさけどまぞふ。執着ののうと胡
夕の若労よつけて妹へ。姉と恨こそこの日未神さくふ才の

是非もそーのと至よ通女健去ふありび時刻をそーけり。業
ドう漆事へ表個を宿多米「モりく宜へ。教四ろそてまさまう私人
沢金ご。豆ふ和ら更ゆへ。検方まーサ。ご私ぐくまさ善私ゆも。
ゆりく〳〵動ーグるけまどご。ぞうやアまゆ海のるとーて幸世
まぐ適へあるう。是うとうまさうと飯で元人藤ぶ宜至幸十
サア玉。猫ぐ出来ましこ。善毎一ッ上ッて。清話さんよおのげ
うさるぷさぞ帯こうこうふ夜ぐ矢くせくうりそ我慢と
て来とまうざ「チャ丁雅どんぐ睡さうざイク。二階く藤

ソーても宜うございませう旦那様「そ
ようの二階へ行く事は厭うございます。妻世連
の尿でもして妻くう徳松「ハイ〳〵
「オ二サ妻私ア厭ヨト二階へ徳松を連う事「何と
モウそうく〳〵お斤合よくて。迚ハ厭まうが寛ア
お父ツ上様「左様サ左様ヨ。よろしうございませう。サア
斤づ升ヨト清話お置う旅く年〳〵ア
るナ様「イヤ自己ハモウ宜お置物でもして、そうの〳〵ぶりでる

「そまどやア姉さん。チヤこりや嬉り里「喜多姉さんざみへ。お
旅の姉さんとハそれが升うさんざョみへつるまでもお旅ハ妻さ
んのお妻さうの姉さんざうく〳〵やアるのう土〳〵里「チヤ姪
悪ーておくまへ私へ本妻どやアるのに何ざエ。お旅
りやう先須此間れを〳〵どやアるのう里「イエ仕様と思つとゝお
旅ず私廃をおいまで。まの限ざものチつるまでもお旅ず
お旅の本妻でござりますなへ妻さん妻「〳〵何様ざう志
らね〳〵「是サ何をエのさナ。何方でも宜どやアるのう

東都　松亭金水編次

第九回

治る処か外の方へ。毒伝変の変りまでべ。茶次第に枕を揺げて米「ハテよく〳〵久治の変よ仰向に居るゴト少しく側へ寄世へ及おきま「ア久治よちゞひろまりません八。ぬけて参ますのも知らず米「よく〳〵変ての。久治ゑう仁方へ入ますトのお打まさも知らず「モシ十仁方へお里さんのお宅でござるますゑ。ちよと

閑情末摘花第五編巻之中すゑ

かめ
四月ホ末うまで丸めて来ました。
春「アレ〳〵今晩はヨトを焙ってそこへ出しておきました。
きうぢ
久治さんヲエ〳〵ヘイ左様久治てござります。
ござ
在ますうち春「アイ居ますサアお這入ト云ふ表戸を
ひき
ピッシャリ
戸を引あけまして。久治へ春世をえて悦り久「ヤアお来さんも
ひろしよ
あゝホ四一所よく丈ホしちやアまアまア
とうとやアとんざまし春「ホゝゝ悦くり
久「ハイ〳〵宜めく〳〵モウお痛ましくらうがお祖も
丈夫と延さまし

ん持ざらう。遅く〳〵来ましたまア久公よく来ました
さ。自ともお来よ遅く。梅く〳〵春「
春「旦那お祖母さんのまし
笑く。実ホ悔しくッて。実うら春
山方へやアやアと。お祖母さんけんもホろゝの挨拶
うらまさと宅へ帰って。伯父をおもひ
るって。小言を百万べんホと並べ
来て。コレ山屋うでござりますト次の間ホ居る。伯父の声助が

手をたゝく。物音と引出せバ左助ハ。何時ぞかくと天窓を丸めし
新発意。米次郎ハ是を見て驚きし　米「何ぞ左助さん。イヤ怪しか
らぬ為躰。是じやア久しい何ぞ。自己への手解に。坊主にするとハ
ことゆゑまするく。左様サ。坊主でも奴でも。あつたアあたり
まする所為が悪くなりますを見てゐやア。お姉様から金銭をよぎ
なく取る。お侍の奴を承知してまず万ちやんと同意して。
お姉様を罪におとし。理が非も角も。ヘアさし当つてお
姉様に。宿をしふあるじやアございませんか。私ハ因果の子。

御母も疾く此事に薄く居るのハ。伯父も承知で居ながら。
金ゆゑとハいへ。つまらぬ仕方。それぞ伯父も先非を悔でゐる
けれどお姉様に左様いふ事を云つてやア。一言の云訳も無く。米
さんもさぞ自己を憎いと思つて。お在なさるだらう。その氏
様ハ是ですると。髷をつかめへて根から帯つて。連のこともと
剃刀で。ぐるく坊主と来ました。モシ旦那へ。さぞお腹も立
ましたらうが。伯父さんの通りの姿になりました。あら。是で
何卒堪忍して下さいませ　米「コリヤアとんだ事だ。御勘

さま
を助さんが。桐生の伯母と同道ーそのの始末よーくとそのの
清話うらうらーくやうく。ますく
ものも を助さん斗りまだ悪のの
自己が方で。一へ五叔母をとうあの手
つとので。俗上のお人とる亀ぐく
さま
を助さん。そもどやア都くる気の毒ぐらくさのトを助ぐ方を
兄久とだ。を助へ利とくの天気を。ぐくと拵まつーを
今久泊ろうやと通り。私ぐ不届ーさんなちぐひ。御草加名

るすって下さいまー 実ほ今ま清話もお里
もあん奉公。を助さんう五依ようそ。坊主ま
友様でございますをウヤト奥より奉公
きんさんが「お爺さま面白ーお里さんも御草
婦君ーて参くお嬢さま「十二私ん左様ーまでも。ううく
お寒待ようて居るやう。婦君
のやん私なことよろうと思ひ実ほアノ時ーお姉さん
ぐその仕廻ーやアるのと思ひまーこのサ「私もサ。金解万

なつさんが金まりな人ざと思ひますよ」そこで発で且那伯父
ひがこと。ますく。そまで激ますぎ
不測とのみ罹ります。のサ米ハアそもアお父さん
ます。きつの茶双紙ゥ。人情本でもあらうとの理さま米
「ハテあゝさうかの傾ご立まく。昨日ゝ「先須クレ例の川
時へ出ようけますとさらう米「今大師河原ゥ。お松の乳母で
大師さ着の住んを急こそ見のの芝の方今不測ざ久
「許ゥ洗でおく性家をしそのト是より路の表ゆ

まゐり
百人程まゐんのでア筵とも早くお敷きませう
と思ふく。座中初めて寄る
久さんをはじめやアお振一人
お座で元人ぐるを探さうっ縁を
川さんよりう洗濯ものの方ゞ宜ございませうよ久「いゝ遠くな
いくっまりやアノ摺ツ売ーのでくまんと藏娘と二ツよる
らないよ「ヤアきつい洗濯ざ。何ぞお寄り米「コレサ雑ーん。
そねぐくの久ゞ。叔さんも音俳一の名ア人ゆゑ初めの客ま

来ことやうや。実よ気の毒でござりまいそで自己の伯父
が軍界さんの方の罪へ怪いよ。その
怪いものゝ物をよろそ。本人はまやアく
が利欲ゝ方ゝ初めと新ゆ方ゆし
よでお流もお茶の方へ舎蔵と
許よ囲囲とのの。程座中ーとう
初ぐト寝ぐ勢せぐ息吹久治
事変那ー夫まりへ。さ百ぐの雑漢よ。疫も自ごと

けまべく久治ハやうそを助を使ひ。白羽根町へいろて雨品
もよ逢。を助ゞ宮の変事ー
さ逢つまべ。伯又ゞ長ゝ子法ろ
る路ゞ雑変ゝまゝ。暇くゝの悪巧。ろくゝ米さんを
逃ざ生ま脇赤の。加勢といゞー
さべと矢ハ不残仙五郎のゝ。サテ
よ行逢ま手と。栄さしゞ仇の外の乳ろてコレを助ゝ
今ゝゝそ方の宅へ。ゞ。演

逢まゝけべお里よ逢ま。委ーくきけべ万ちつさんと。ゞ花ーの
きる斗男でよく自己ゞ居而三所よ逢ま逃ゝ生ーとろ。ザア
ふ伝の逆恨ろろく。こんを用ふ逢ま
ーろと。を助を捕てその大立腹
アろゝ重ザア和解ゝ歩ゞ
イゝ一三ま句もゝ。そのゝ
のまお逢るのろ。種ゝ温まの
でろうも詫言るーふ。コレこの通り米さんのえるまる

くる〳〵坊主よ家こそべ。それまでわし〳〵が解。実よう法遠く
ざとこて。賢すで判さるみるえよ
でも和歌許り〳〵近のでく桐生の伯父が路主を。行〳〵ねけ室
やうるうねくとこて。往主のやうよ筆く居さる。まも
もざがサテこの天言じやア。翌うう商売も学べ。ぐうし
よう空ろうこと言く。私の方へ参りますとうらア。まく思へ
きつぼ。ろーりろ
胆が従と。種く理屈もやしみとど。跡のまりて役よ云べアア
と名も角もけ如主をお花よお影中て。せ不法とお偽やきう

と思うく来りまーさト書面よ筆て話言るか思ひ掛線ス方
ちろいさすひ
ちろ小を助う富よ相りし。まこ
さてえうまこそへひ男も海ぶとんのう
るまこべかーも弱つと風ようんせべで一行ご右助さんも。余まう
いくちのまいこご仮れる奴が彼是もるう。殺き倒してやまこべ至
ホ。坊主よ情ないナハく。そーて主乳の法工。周ごがこと船縣所へ
うこ許るようへ近るるう許こ
里を寄うさうて誰が元あける。現在の伯父よ対して
ものも。勿論右助さんよ内祝

を悔んで。清搗と振処しさのハ。世荒療治うも志ろ丸が。
此方ちやア惟一人の女児を
まこと云そく。彼奴と絶えを決せくやらァ。る庶こしい
久イエモシまく茶さんと。おお招との処置で。やさバ私でも
一ツさるゆゑやアごぞのまゐん。今朝態く素つと首表ハ。お
のさん振る悪巧を悔ままでおろまで。伯父がこの為体。その伏
と何故ろうと分ず巻てお暴る甘へモシまと不分解也挨拶
るく。茶さんへ使ま也ハ私ら。ひ
さすが不得久法へ東み。てを尖く云放せバ百左ろも今さろふ。
当越してを居ようける

第三十回

折ろう隣の陸よまめけ。あ入来るこの家の母親。久治と
吉助よる波ま新一母「何うの容よへ次の夏で安ま
が。今丁稚の徳松う。久
米次郎ホ遠こ和。今も久
四つく。直よ和蘇所く狐也とふのを。種くふ実る駆一。

出る西へ出ようぶ。苦も無く白ざらうぶ。そこへ仇人団志のこと。叔母の親しの中で。血で血を洗ふやうなもの。おとゆへぶうう治方もあらう。アア和歌亜への仲こか。後てとなだ尼ろう。浪風ふしみ園田さき。ちぞお書でであうう六。幕ーふうもまぶ親ナ。今御ナサテ仇の松ーても受入ます。網へ墨飛く和歌所く。出るとうそぶごぶります。夫ゆへまづ徒松を。生く松くくその手ぶりと。祖まうーて上ますーとある。勿後最初へ我任で。

お源様を誉うさうう安寧とうとおもふ。叔父さうぶきものぶ。娘の刑深て居る招状を。開松東拿うり狂気うな出来ますとやアごぶのまぜんう。他ぶ悪くへするのぶうよ。手段なを。立派よとそ。動者もうりと笑絶をするうと。夫へ上よ。立人の子強決者。そこを仇ぶ二枚月の。敵役でも仕さうなお斗らひへ。聖私ぶもの腕ゆも病ますせんート時く安ーす万ぶうぶう。巧のへぶの松立ーさよ。ホ縞をまちく頬えつのまぶへ万ぶ縞立車ーて万イヤ返好

まさる立方「伊松さうかのう。吾ゞ女児のそくさうぢゃ。吾ゞ
さる方のタベ「左松ーてそれまで米さん手うゞつまうぬ。万一
親のそを思ふへ誰ーもおそだてる庶ゟ児ゝと可愛と。
孫の通りアノ唖方の米次郎芝へ
ゟゞやアるゆ。況てお滝ゝ親孝行で。寡ゟ然ゟ生まさうき。
夫をこーと吾ゞん中。推楽ーて下さまへ久「そまへ米ゝど
ぢゃもれ也。まぢさう膳医ゟ。這般そすてのもゟて居ます。
勝ゞ息災で居さう伊細ゝ事ゟめへゞ。そ時ゟ米さん

一を知つてゝ二を知らわ事意元アノ通りゟ寿ことゞこと米次郎
ゟゝ動者くる殿ぢ。程乃をきそれで
人ゟ出るけゟあるゟ米次郎。今夏加ゟ奴ゝと条。あの伯
父ゞ悪のまうひ「伊松ーてとるゟや。そをおろーて殺ーてそを世れ。米次郎ゞ
お滝ハてを殺ーてトのをそ久「ヤモシくお言の中ゟぐ。まお滝さんゞ
寡ゟ息災で居さ時ハ。伊松

の男を抱きまするとやすの女房ハ「娘ハ死ざふ是ひハるのごもシ
ひろとなき百一緒く居そ。おくハ久くまく来まべその時ハ茶次平の勘蔵
ヲ吾ゞ勘解ーて宅へ入をお里と厭せる名のエサ久「茶和
まんまうをまもよー。そ処で清蔵ゞ納まりハ「アレハうるゞ畑
助のこと。大金を出ーて身受ーと安ざゞ。昌ろと毛うう茶よ
やう。望ゞうくぶ吾ゞ門うけく。茶汐を舞う名のエ久「そ
処でお助ゞこの天言ハ「イヤハヤをまゆやアチト当惑ゞが
まれうんん夫へ当人のお不法で高さことぞく。吾ゞ勘つさ曜でもるの久「イヤ勘

らねとハ仕方まのお情をうけて悪巧のを借ひとはさだうぞ。
山脇来茶さんよ経つまく。お清さんゞ強生ーさうゝモシ死ねで
茶さんを。解死人よまうと今ハ仕方さゞ。お助の天言もをのた
理トまく万をつ笑ひと舎ハ「イヤ半和ハ幸ハ弱ゞ。
遠のお在のるい利益のの。る和をお助ぶのう天言のエ方よ
少もお清ゞ金のまるまでのを究金百両でも二
百両でも。望ゞ仕事をせまお世うゝくその仕りお清の汐方ゞ和
まを和へけまやア。天言の利損をうやアぞうも注方ゞ更 久

「まるくぶ主義の仮文を下さいます」五「そりゃ仮文ぢゃ人のものをまるくふ継母も変く居る。この万ちゃんは云さとを。ちゃなどを男よやないく」いうさ万ちゃん左様でござりますせうがイヤ是ハ早朝より。のろくとお言葉ぢゃ。ドレ此服やまをうとこの家の母みも服を着よ。喘く立寄る。「ちゃくて入来るまの。のりのそ。ちゃく。「お仮ハアるまら。ちゃくと通ふ傾城清話その元形もちゃくまんも万ちゃんまんて芸を知ひるまいどやアあろまゝせんうまへ。けるゆうまの中うち成度を聞を出ーまーても一向へんど通ふもまー。早くちゃの宅へ入くお呉るまーな。余まりぢゃうさまぢゃら。今日ハ男ひまろく参りまーョ。化を騙をゆも絵ヴみまゝさうまエ。何指とも早くーてお呉るまーみトも云て侍へすを喜ぶ。万ちゃんへ今夫よ。母のえる間もいとしく。ちゃの実論く白眼つけ「婦妓などもと云ろう。余まり物と動ち奴ざ。左指る傾うちゃ方うう。僅但とうけるものう。横み方も元と分て。安んーてへ。その時うう動蕾ぶる「エ来さんへ動書とエ。まハまゝさぢう

あてつけてト云を側から母親がよれ/\見るより贔屓のその夜の
始末万右衛門が巧みの工事で云けれバ清蔵ハ見相を変て万右衛門
が傍へ摺よつて。左様ならバ弥ハ存分ハ恁切どうしても私を
騙し。おまへを義理にて米さんと勘当させておまへの心根。そ
くや悔しいト克乱し。傍ら卿ちつまつ顔よ。万右衛門ハまさ気よ當
惑して云句も出ず。母ハ心よ嘆く。おり人ども知らずまさ気
理づく。清蔵と呼つより。また疑しき詞を尽し悪いやう
ゆへせまゐらず。思つてと嘆きまで。清蔵ハ立あがり。帳

もさへとまらくよ。償ふうち系もちりくる
是こそ米次郎と久治が面傍ゆく。万右衛門ハ子圖くるせ
旦那をよそつて。その意趣をもときさんとの耳ぶひあり
跡見おくつまく万右衛門が「ハテサア今日ハめでたくまゐる康めのう
来る日でえ。惑母さぞ検が立てさらうト首を切らる額をそ
母へ「元ハといへハ米次郎と。浮世が悪いから起つた事。法ちあ
萬根斗兵衛を恨む。理もござりませんトいひも終らぬ子
まこ一挺の笄をとりて具とあバ。どうやらまる何じやと思

やる処を。跡より来る吉助と久治が。宇兵衛の前後に立つゐて。万
吉ハ目礼し久々サアお孫さんを連て来ましたといひつゝ
宇兵衛の前をさし出せバ。お孫ハ母子袖をあて面目なげに内へ入る。
万吉ハ泪ぐみし。是ハまアどうじやと呆るゝ斗なり。母も立出是
まで。倅よ孫よく来てくれたり。嬉しきにつけても万吉ハ。お孫が
傍へ寄り委しく。親に苦労をかけたる詫をし。涙ながらに
伺ハすく。懐より一通を出し。一通。委細ハこれにと出しす
ゆゑ。万吉ハうけ取て。さらさらと読下し万「今まで夫じやア今

まで久治どの。親子の世話に来て居たのか。左様とハ夢にだ
もこの親父ハ。気短でも幸ゐ故にも。子でも根から然もなく。出児に
変倍なく。治らもなぞかと思ての事だ。去りながら勘当まで
居ても子得父子の恩愛へは忘れぬ所也。万吉が
憤り。今まち解る薄氷の。朝日よむかふがごとく。無
念で居たりと。思はぬ泣きに種々の。巧をなして入るよ。逆
恨うけしも今さらにポチト後悔の面持なり。この時久治ハ
弟次郎が母親に向ひて。暫時もお嘆きなされて。お孫さん

さく集まで居まゞ。何ゆも仔細ないとの事。何卒茶さんの
心勘違ひ。四銭未とのよう万ゝも何と
添く勘書の仕するゆぞ。好八元来婦しとく。せーとる
うれバ忽ち元都一。伯又さんの心が解。左様ハ仰るまゝバ。
私よ参く仔細ハまーとのよようで徳松を。思が易くまら
せん。茶次郎八家よ帰う。吉日と撰び
てお里と婚姻をまし。清蔵を思が易の家ゝおまさて。好ろう
とも安楽よまゝさせける。こゝゆ放く万ゝと茶次郎の中八
元の如くまりーゆよう。茶次郎八久治と お澤ゞ縁のことを 勝
まろふ。お澤ゞ者よ元てハ大工のある久治まり。殊よ浮き
業りを結びとるこまゝバ今さら変改まべきよあらべとて。
改めて久治ゞ方へ送り。万ゝ好多の本銭と貸のさ
く。久治よ呉服店を開々せける。日く繁昌して並ゝう。
然まハ久治八折を見合せく。幸世清ゝ助ゞ者のうへ。
好と万ゝよ伝入合。且清ゝ助ゞ衣紀のことも伝ける。
も早速相談そのひ。清ゝ助も本意一通り。幸世ハまゞ茶

次第ゞ方〳〵へ引移り。久治が服改めて。清助が方へ送りけるに。其の夜半ばかりむくり〳〵と起て。なほき事を述べし。曽て万左衛門が賣ト者蓍海丸旅籠の礼をなし。さて助八駕の生るまでの手完と〳〵て。金二百疋を送り。且妻世清と助八泥町の庵へ。先渡の礼として。数多の金銀衣裳など送りぬ。一ト通り捌き舎るに人〳〵。こゝまで来りしが。月出でゝ見えける次第ありし

閑情末摘花第五編巻之下了